

よろずは

平成二八年
六月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

君きみが行ゆき

日け長ながくなりぬ

山やまたづの

迎むかへを往ゆかむ

待まつには待またじ

万葉集 卷二一九〇 衣そとほし通のおほきみ王

【意識】

あなたがお出かけになってから長い日数が経った。
向かい合わせに葉をつける山たづのように、
迎えに行こうか。待つにはもう待つまい。

軽かる太子のひつぎのみこと軽かる太郎女のおほいらつめ（衣通王）の悲恋物語

古今東西を問わず、人は悲恋物語に心惹かれるものなのかもしれません。この歌は、『古事記』からの引用として『万葉集』に掲載されていて、軽かる太郎女のおほいらつめが、実兄である軽太子へ贈った歌とされています。美しさが衣を通して輝くことから、彼女は衣そとほし通のおほきみ王とも呼ばれたといえます。美男美女の彼らは惹かれ合い、兄妹でありながら恋人同士でもあったこと、皇太子であった兄が伊予の湯（道後温泉）に流刑となつたこと、などが『古事記』には描かれています。

古代日本においては一夫多妻制で別居婚が一般的であったとされ、異母兄妹が結婚することもまれではありませんでした。しかし、彼らのように同母の兄妹の場合、婚姻は禁じられていたようです。つまりこの歌は、禁忌を犯して結ばれた宿命で悲劇的な恋を象徴する歌だったと考えられます。

『古事記』には、妹が兄を追って伊予へ行き、再会した二人は共に死ぬことを選んだと記されています。なんともドラマチックな結末です。

【万葉古代学係】